

# 竹富町社会科副読本「結び合う島じま」

## 再改訂のための事前調査および現地調査最終報告

2002年8月20日

発表者：伊藤 誠

調査地：西表東部（古見） テーマ：古見の橋について

### 1. なぜ西表なのか？

私は、竹富町社会科副読本の再改訂に関して、ここで中心となる、社会科2年次および、大学院生、必須単位(?)である島嶼の学生いずれでもない(社会科4年次)。では、どうしてこの場にいるのか?ということになる。

簡単にいえば、卒論の関係上である。自分の卒論は、大学院生の伊良波先生(現附属中学校教諭)を対象とした『(調べ学習においての)「教師の指導性」』に関するものである。例えば、各島の責任者=教師とすると、各島の学生=生徒にすることができる。そのような中で、時には学生の責任者となり、時には一学生となり「教師の指導性」を学んでいこうという意図がある。

以上のような背景があるため、私の調査地域が西表であることは、「伊良波先生が西表であるから、自分も西表」という理由である。

### 2. どのようにテーマを決めたのか? ~テーマへの思い~

調査地域に対しての思いがない状態であったので、テーマ設定も迷っていた。しかしながら、里井先生が講習会のため、現地へ行かれ、その報告において、古見についての新テーマをという状況設定、「橋をつくる劇」(1720年後半)があったという話から、私の調査の第一歩を踏み出すことができた。「橋」というものは私たちに日常の、例えば交通とのかかわりの中で、切り離すことのできないものである。日常性を持つものは、そこに住む人、一人一人に何かしらの意味を持っているものである。それは、授業の中で扱う意味や価値を、要するに教材としての価値を見出すことができる。そのような仮説において「橋」を教材化にあたって扱うことは、意味があると考える。「テーマへの思い」は着々と大きくなりつつある。

### 3. 調べる

里井先生の「橋をつくる劇」から、「橋にまつわる劇とは?」という疑問が出てきたが、まずは、古見の橋について調べてみた(「古見の橋とは?」)。

#### 古見の「橋」って何?

竹富町史・別巻3「写真集 ぱいぬしまじま - 写真にみる竹富町のあゆみ - 」(p.198)には、

「集落の南側に前良川、北側に後良川があり、両河川に昭和三十年頃まで三離橋、大枝橋と呼ばれた石積み橋が残っていた。民謡『砦(はし)ゆば節』には橋のことが歌われている

る。(・・・疑問)橋は後に鉄橋に変わった」と書かれていた。

ここから、古見には二つの橋があり、現在、その橋は鉄橋であるが、昭和三十年頃までは石積みの橋がかかっていたことが分かる。ちなみにこの石積み橋は引用した本に載っている(p.197)。そして、その石積み橋について、民謡「碓ゆば節」が関係していることも分かる。ここで、「民謡『碓ゆば節』とはどのようなものなのか?」という疑問が出た。また同時に、「この『碓ゆば節』と橋にまつわる劇が何らかの形で結びつくのでは?」という仮説を立てた。

#### ア．分かったこと

古見には二つの橋があり、現在、その橋は鉄橋であるが、昭和三十年頃までは石積みの橋がかかっていた。

石積み橋について、民謡「碓ゆば節」が関係している。

#### イ．疑問

民謡「碓ゆば節」とはどのようなものか?

#### ウ．仮説

「碓ゆば節」と「橋にまつわる劇」は何らかの形で結びつくのでは?

(同本 p.201 には)

「前良川と後良川の間に形成された集落で、架橋は琉球王府時代からの行政の課題だった。架橋は最初、木造橋だったが、後に石橋に変わった。橋は台風などの自然災害を受けながら補修された。その中で前良橋、後良橋が1956年(昭和三一年)に架設され、河川の往来が便利になった。」(同ページに鉄橋の写真あり)

#### ア．分かったこと

石積み橋の前は木造の橋が架橋されていた。要するに、木造橋 石積み橋 鉄橋と変遷していった。

(年表には(p.299))

1690年(康熙29) 「三離橋架橋。(前良川、南又橋)古見での橋の始まり。木橋長さ228 尺幅3.6 尺」

1696年(康熙35) 「大枝橋架橋。(後良川、北又橋)木造長さ79 尺」

1715年(康熙54) 「古見村の三離橋、大枝橋、石橋に改築」

(1956年の架橋の記載はなし)・・・疑問

1973年3月(昭和48年) 「古見の前良、後良両架橋竣工」・・・疑問

#### イ．疑問

なぜ同じ本であるのに、1956年の二つの橋の架設が年表に載っていないのだろう?

1973年の二つの橋の竣工は何であったのだろう?

#### ウ．仮説

1720年代後半の「橋にまつわる劇」は、「石積み橋」にまつわる劇であるのでは?

### 民謡「碓ゆば節」って何?

#### ア．「碓ゆば節」が見つからない!!

「碓ゆば節」とインターネットや図書館で検索してみても全く検索結果が得られなかった。そして、民謡に関する本で調べればよいと思い、何冊か調べてみたが、なかなか「碓

ゆば節」は出てこなかった。なぜなら、**曲名が違ったから**（・・・疑問）である。

新崎善仁著「八重山民謡の考察」には、「喜舎場永珣著『八重山古謡』によれば、」という記述があり、「八重山古謡」にも同様のことで、「八重山民謡」（著者は同じ）が参考文献として取り上げられていたので、ここでは喜舎場永珣著「八重山民謡」を引用する。

喜舎場永珣著「八重山民謡」には、

「元来古見村はこの二大川の三角州にあるために、橋は古見村の一大生命線であった。最初は橋は皆無で潮の干潮を見て渡行し、そのご木橋の不完全な橋で通行し数多くの人名を失ったりしてきたが、尚敬王の世代正徳五年（1715）当時の古見首里大屋子宮良長休氏の請願陳情の結果、不完全な木橋を石橋に改築する許可を得て、黒島首里大屋子を監督に仰ぎ三離橋は同年7月13日着工し同30日竣工を見たのである。長さ役272<sup>㍎</sup>位に幅約4<sup>㍎</sup>くらいで使役人夫は御蔵夫3200人、公夫380人を要した。

大枝橋は同年引続き着工され、長さ約380<sup>㍎</sup>位に幅約4<sup>㍎</sup>位で、同年8月1日から同12日に竣工したと記録されている。」・・・（略）・・・

「（橋世バ）元来は『橋世バ』であったが、後世に至り『橋ユバ』に転訛してその意を失いつつある。古見の古老について調査すると『橋ヌ世バ給ボラレニハイユウ』（交通安全の世代にあいまことに有難う御座います）の意で、『これまで不完全な木橋で不幸にして生霊を失った事もあったが、古見御役人の御蔭によって、石橋の堅固な橋上を安全に通行することの出来た事はまことに仕合せな世代のお恵みをうけた。すなわち交通安全の世代に合った、吾等の幸福は実に有難い』の意である。稔る世、実きり世、ミルク世、大和世、唐世、断髪ヌ世、アメリカ世等の如く革新的世代を称する語で、なかんずく古見村は水を征服する石橋が生命線であったので、『交通安全の石橋の世』に恵まれた仕合せな世の意からきた『橋の世バ節』である事がわかった。」と書かれている。

### イ．分かったこと

「**㍎**ゆば節」は「橋世ば節」であった！！。

（解説）「**㍎**ゆば」の「ゆば」は言葉のなまりによってそうなった。また、古見（村）にとって二つの川にかかる橋は古見の人々にとって生命線であった。それが、石橋の建設によって安全に通れることになったことを、大和世・唐世・アメリカ世などの時代（背景）を表す象徴的な言葉のように「橋の世」として表し、「橋世ば節（ハシユバブシ）」となったということ。（ちなみに、「**㍎**ゆば節」の「**㍎**」という字は、「いしばし」という意味を持っている。（小川環樹ら著「新字源」より））

「**㍎**ゆば節」がどのような歌であるのかは、上の引用文のとおりである。二つの橋ができるまでのことが、歌詞にされている。

### ウ．疑問

いつ頃「橋世ば節」から「**㍎**ゆば節」に変わったのか？

### エ．ここがおもしろい！！

人々の橋に対する思いと、そのような思いから歌がつくられ、歌の題名が「橋世ば節」と名づけられた。しかしながら歌の題名は、「橋世ば」から「橋ゆば」に転訛していきその意を失いつつあることの矛盾（ズレ）はとてもおもしろいものであると思う。

（参考文献）

- 1) 竹富町史・別巻3「写真集 ぱいぬしまじま - 写真にみる竹富町のあゆみ - 」竹富町役場町史編集室 平成5年3月31日発行 p.197 p.198 p.201 p.299  
(関連)「望郷・沖縄5巻」1993年(昭和8年)
- 2) 新崎善仁「八重山民謡の考察」刊行委員会 1992年9月20日発行 p.295  
(関連)喜舎場永珣著「八重山古謡」(上)
- 3) 喜舎場永珣「八重山民謡誌」牧港篤三 1967年6月30日発行 p.300~p.303
- 4) 古見小学校百周年記念誌「夢の花」p.56  
(関連)宝玲叢刊「望郷沖縄第5巻」p.74

## 中間報告会より～どうして集落移動がなかったのか？～

『そのご木橋の不完全な橋で通行し数多くの人命を失ったりしてきたが、』(喜舎場永珣著「八重山民謡誌」)

要するに、橋の通行のために多くの人命を失ったなら別にそこに住まなくて、どこかへ移住したらよかったのでは？ということであった。その疑問を少し調べてみた。

### (自分の仮説)

「どうして集落移動がなかったのか？」に対する自分の仮説は、「古見集落は重要な場所であったのでは？」ということがあげられる。古見には「アカマタ・クロマタ・シロマタ」の登場する豊年祭がある。そしてこれは新城や波照間(?)などに伝えられたというようなことを聞いたことがあったのである。とすると、古見には昔から祭りが存在していてそのような祭祀の存在から、この集落の重要性が感じられるのではと思った。これらが仮説の背景にある。

### ・豊見山先生との話から

「橋世ば節」(石橋がの完成)は、琉球王府との関係は深いことは前回の発表で明らかであるが、今回の疑問も何かしら琉球王府と関係があるのではないだろうか?と思い、琉球史に詳しい豊見山和行先生に少しお聞きしてみた。

豊見山先生が言われるには、近世の八重山での集落移動などの村人が大規模に移動することは難しかったのではとうことであった。また、移動するには、琉球王府の許可なども必要であったため、手続きなども困難であったのではとうことであった。

また、逆に先生が言われたことには、近世はむしろ船の往来が盛んであったとうことであった。私は、橋について調べているが、それは橋があって当然のこととして、調べている。しかしながら、近世の交通において船が重要視されていたことによって、「どうして橋を作ったのか?」とう、自分の中では根本的な問題に直面したように感じた。これは結構ショックであった。

### ・麻生君との話から

豊見山先生との話の前後で同級生の麻生伸一君と話をした。麻生君は琉球史が専門であるので、古見についての話をすると、古見に関する資料を提供してくれた。

### (提供資料)

- 5) 石垣市役所発行「石垣市叢所1」平成3年3月30日発行から「慶来慶田城由来記」
- 6) 琉球新報社発行「新琉球史 - 近世編(下) - 」1990年3月5日初版 1991年11月10日3版から「11海上交通史の諸相(高良倉吉著)」「10西表から見た近世(里井

洋一著)」

## 船と古見の関係

麻生君との話の中から、古見と船の関係が見えた。古見には「すら所」とよばれる造船所があったという。

### 「すら所」とは？～古見のすら所～

「すら」は沖縄の古語で、木の梢、あるいは鳥の巣を意味する。巣の中の卵を母鳥が温めてヒナがかえることを「すでる」と表現する。～（略）～古琉球の人びとは、造船所を鳥の巣になぞらえ、母鳥たる人間の営みで船が仕上がることを、ヒナがかえり成長するイメージでとらえた。進水式は成長した若鳥が巣を飛び立つことであり、船は海走る鳥であった。このようなイメージが、造船所を鳥の巣になぞらえる独特の世界観を成り立せしめたのである。石垣島や西表島にはいくつもの「すら所」があった。そのなかで、古文書に登場する西表東部地区の古見のスラ所がとくに私の関心をひきつけた。「古見すら所」「か

ぎら崎すら所」とは具体的にはどの地点にあった造船所のことなのか。<sup>1</sup>

### （分かったこと・考えたこと）

「すら所」の意味は、上のとおりであるが、西表にはいくつかの「すら所」があり、古見集落（周辺）には「古見すら所」「かぎら崎すら所」があるということが分かった。

### 造船の流れ

西表島は造船用材の豊富な島である。必要な材木を山中で伐り出し、それを河川を使って河口まで流すと、いつでも用材は確保できる。したがって、造船所の立地は河口付近でなければならない。しかも、作業が終わると進水の作業が待ち受けているので、作業場から海までの船下し（琉球の古語で「すらおろし」といった）が容易でなければならないはずである。～（略）～完成すると、満潮時（あるいは大潮）を見はからって船に縄をかけて引っ張り、後良川の形成した天然の水路に浮かべたあと、そこから外海に進水させたと想像される。

しかし、古見のスラ所には難点があった。とくに進水の時、作業場から外海のラインに乗せるまでの距離が長く、縄をかけて引く人夫の数がバカにならなかった。そこで第二造船所確保の必要が生じたのだが、進水距離が短いとの理由で選定されたその適地が、「か

ぎら崎」であった。<sup>2</sup>

### （わかったこと・考えたこと）

西表は、比較的川が多い島である。それを利用して、上流で切った木を川に流して、河口まで運んでくる。そして河口において木を様々に加工して、船を作っていく。できた船は、人が船の浮力がおよぶ水辺まで引っ張っていったということが、その当時のこと

---

1琉球新報社発行「新琉球史 - 近世編（下） -」（11海上交通史の諸相（高良倉吉著））p292

2琉球新報社発行「新琉球史 - 近世編（下） -」（11海上交通史の諸相（高良倉吉著））p293

ではあたりまえのことであるだろうが、意外に驚いたところである。現在の造船がどうなっているのかは分からないが、船ができるまでにはかなりの人員が費やされていたのではないだろうか。資料によれば、「地船クラスの船になると、従事する労働者の数はのべ約一万人ほど必要であった。造船の期間はフルシーズンではなく、旧暦の12月から2月、つまり農閑期と指定されていたので、・・・<sup>1</sup>」ということが記述されていた。

### 著者の思い

スラ所時代が去り、今は、よほどの関心でももたないかぎり見のがしてしまう「遺跡」に変貌を遂げ、かつまた、付近の住民の記憶からもすっかり遠のいてしまったスラ所の跡。

しかし、海上交通史の重要な証人である。<sup>2</sup>

### (わかったこと・考えたこと)

教材化をする上で、その調査内容に対して、自分がどのような思いを持っているかは、大事であると思う。例えば、「すら所」を中心に教材化を試みた場合、著者の思いにもあるように、住民の記憶からすっかり遠のいてしまっている。そして、当然現在、使われているわけでもないのだから、現在と過去のつながりがないような気がする。このつながりを発見できれば、教材化できるのではないだろうか。

### (西表との連絡(状況))

#### 里井先生から

- ・石垣市 新川小学校(09808 2 4354)平良信明先生(古見小学校で臨時をされていたとき、劇をされたい。また、台本を持っているのでは?ということ。)

#### 古見小学校(09808 5 5350)校長先生から

(校長先生の旦那さんが台本を持っている。劇はかなり前のことらしく、校長先生は来て2年目なのであまりわからないらしい。劇の題名は「古見の橋」らしい。劇は学校が中心となったのではなく、地域が中心となったということ。学校のメールは機能しているが、あまり使っていないとのこと。メールのやり取りをする約束。)

- ・古見 親盛ヒロ子さん(09808 5 5002)(劇をした当時の人)

#### 金城絵美さんから(政治学西表調査に行った際)

- ・石原昌武さん(09808 5 5444)(古見公民館長)

---

1琉球新報社発行「新琉球史 - 近世編(下) - 」(11海上交通史の諸相(高良倉吉著)) p295

2琉球新報社発行「新琉球史 - 近世編(下) - 」(11海上交通史の諸相(高良倉吉著)) p295

## 西表日記

8月5日(月)～6日(火)

8時すぎ出港(本島)

10時半すぎ石垣港到着

14時40分ごろ石垣出港

15時すぎ大原到着

歩いて大原小学校へ、俊弥に連絡し、大浜先生と共に迎えにきてもらう。豊原の教員宿舎に着き、そこから英たちを迎えに、大浜先生と共に大原港へ。そこで安栄のバスを待っていると、偶然、石原古見公民館長がいることを教えてもらった(16時すぎ)。そこから、石原さんの車で、石原さんの自宅に行った。そこで話を聞いた。

(5日の早い時間帯に平良信明(しんめい)先生に電話をした。信明先生は学校単位で初めて劇をされた方だが、大底朝要さんのほうが詳しいから大底さんに聞いたほうがよいと言われた。)

### 古見公民館館長 石原昌武さん からの聞き取り

大原港で偶然、石原さんと出会った(安栄の人が教えてくれた)のは驚きであった。ワイン色のワゴン車に乗っていて、車に何か書いていたから、すぐわかったのだろう。大原港から古見までは意外と遠かった(石原さんによると6~8キロ)。大原と古見の集落の間はあるのはサトウキビ畑だけといっていいくらいで、山道のようなようであった。古見は8月3日に豊年祭があったそうで、今度は10月に他の祭り(多分、結願祭)があるそうである。今回の調査の趣旨や自分の調査内容などを話した後、石原さんは話を切り出された。石原さんは台本を持っておられた(詳しくは後日)。宮城信成さんが21歳のときに行われた劇であるのだが、そこには、以前紹介した古見の橋が木でできていた頃、多くの人命を失い、そこから石橋をつくるわけだが、そのような橋にまつわるものを後世に残したいという思いから、将来を担う子どもたちに劇を通して知ってほしいというところから、この劇ができたというようなことを石原さんはおっしゃっていた。

劇は、30年ぐらい前に行われて以来、されていないと思っていたのだが、数年前に学校で行われたらしい。また、劇するためには事前学習が必要であるが、その事前学習を地域の人材バンクを利用して行っているらしい。

公民館長さんは、とても積極的な方であった。劇のことにしても総合学習などを意識されていたし、自分の調べたことに関しても興味を持って自分の調査報告書(最終報告書)を読んでいただけた。また、台本のコピーやのために古見小学校を利用することや、古見の地域の劇を知る人々への聞き取りに関して、(いろいろ)聞いとくよとおっしゃられた。

(データ)

古見小学校全校児童9人、古見集落26世帯

### 疑問に思ったこと

昔の台本をどのように子どもたちに教えるのか?

事前学習はどのように行うのか?

人材バンクとはどのようなものか?

8月7日(水)

石原古見公民館館長さんからの電話(8時半)で、古見小学校に台本のコピーを取りに行く。そして、石原さんの紹介してくれた 新さん の家へうかがうが、農作業に出ておられたらしく、そのときは会えず。空いた時間で、前良橋 古見集落の海岸端 (偶然英以下4人に会う)由布島 後良橋をまわる。再び、古見集落の海岸端に行き、古見のバス停で休んでいたら、偶然石原さんに出会う。そこから、石原さんと共に 新さん の家へ行く。

#### 新初蔵さんへの聞き取り

新さんが小学校1年生の時、宮良信成さんが古見の橋の劇を作られた。そして、新さんが小学校3年生の時、宮良安亮さんが古見の結願祭を見て、それに影響を受け、石垣において、古見の橋(その他の劇も)などの劇を披露したらしい。昼間は宣伝をしまわり、夜、映画館で行ったらしい。宮良信成さんがつづいた劇を前にも述べたように、大底朝要さんが後世に残すため、書き写したのである。

新さんは、どのような「思い」で劇をされたのかということに対して、その人物になりきってやっていたと答えられた。そこで、シナリオの話になったのだが、自分は、シナリオを見ていないが、文献調査の段階で、劇のメインは琉球王府への陳情の結果、石積み橋が完成されたというところだと思っていたが、新さんの話からは、登場人物に満城(みつぎ)氏(悪)と大工氏(善)がいて、二人の橋にまつわる争いがとてもおもしろく、見どころにみえた。劇の最後に、橋世ば節にあわせて踊る(全員ではない)のだという。前良川と後良川の間古見の集落はあるのだが、農耕地が集落の外に点在していたため、橋はそこに向かうために必要であったという。結願祭などの伝統行事において劇をする事は、伝統行事(劇に託す思い)を次の代に伝えていくこと、また、地域の人々が集まるよい機会であると石原さんはおっしゃっていた。前良橋、後良橋などをみて気づいたことは、橋のつけ根や橋沿いに石積みがしていることである。普通の橋は、石積みなどされていないという認識があるので、珍しいなと思っていると同時に、石積み橋と何らかの関係があると予測していた。聞いてみると案の定であった。住民の声でなったそうである。これに関連し、新さんは、古いものを新しくしようとして、(いろいろな昔ながらのものを)壊してしまった。今、復元しようとしているが……。とうようなことをおっしゃっていた。また、石積み橋が今も残っていたら、古見が本当に古くからある集落であることの証明になったろうにともおっしゃっていた。自分もこの話を聞いて、少しさびしい気がした。

新さんのお宅を出て、石原さんと別れ、みんなと合流し、昼食。5時半頃に親盛ヒロ子さん宅に電話し、アポをとって6時ごろにうかがう。

#### 親盛ヒロ子さんからの聞き取り(新森基代子さんとあと一人)

親盛さんのお宅へうかがった。親盛さんを含めて3人の方が話をしてくれた。まずは、自分の調査の趣旨などを説明した。そして、劇をされた方々の変遷をおききした。

宮良信成さん(台本を書かれた、結願祭で劇が行われる)昭和21年度在籍

宮良安亮さん(結願祭を見て、影響を受け、石垣で公演を行う)昭和22・23年度在籍

(以後、結願祭で行われていたが、人口の減少によって途絶える)

平良信明さん(古見小学校で行う)昭和46・47年度在籍



(最近) 新城先生 宮良先生 (いずれも小学校)

親盛さんは、石積みの橋の時の川で、泳いだり、遊んだりした経験がある。後良川には、石橋の当時、約 12 の橋脚があり、その間を水路が流れていた。そして、その古見集落から一番遠い水路はとても深かったそうである。前良川には、8 つほどの橋脚があったらしい。

親盛さんを含めた 3 人の方とに聞きとりをしないと、偶然、大底朝要さんが来られた。石垣に話を聞きにお伺いしようと思っていた人が今ここに来ている、しかも、自分のテーマについて、カギをにぎる人物であったので、とても驚いたし、感動した。

### 大底朝要さんら (大底さんを含めて 3 人) のからの聞き取り

石積み橋を作る時、古見の家々にある石積みを橋の建設材料に使ったので、家々から石積みが消え、その代わりに竹を使って家の塀代わりにしたという。昭和 8 年の台風によって、石積み橋が使えなくなり、解体され、新しい橋をかけるきっかけとなったようである。石積み橋当時は、石積みの上に板を置いたり、線路が置かれていたりした時代があったそうである。橋ゆば節は、橋が作られたときにつくられたそうである。

橋の聞き取りをしていると、後良橋の碑文の話になった。後良橋付近に工事が入る (現在近くで工事中) らしいのだが、石原さんや大底さんその他、古見の人は、その工事の際、碑文を動かすこと避けたいと思われているらしい。しかしながら、どこで話がくい違ったのか、大底さんは碑文の移動を承諾したと言う話になっていたらしい。そのようなことがあり、その場は、石原さんに電話したり、業者に電話したりと大騒ぎになった。大底さんは、便利さを追求してしまっているような昔ながらのものをなくしてしまったとおっしゃり、碑文を動かすことは、碑文を撤去することと同じだとおっしゃっていた。

### 文化遺産や昔ながらのものを残す意義 (自分なりに)

私は、文化遺産や昔ながらのものに興味はあるが、お金をかけてまでそのようなものを残す意義を自分の中で、明確にすることは出来ていなかった。しかしながら、この話を聞いて、少し自分の中で明確にすることが出来たと思う。橋や碑文は、例えば移動や撤去がなければ、そこに存在している限り、そこにある (あった) という証明になる。例え、なくなったとしても、そこに存在していた (実際に見ていた) ことを知る人が生きている限り、それは証明することが出来る。しかしながら、存在を知る人々がなくなってしまった時、例えば、橋があったことを実際に見たことがない、そして碑文が移動したことも知らないというとき、そこで、実際に存在していた場所などとは違った所にあったという認識をしまうおそれはないだろうか。要するに、簡単に言えば、昔の事実と間違った解釈をしてしまわないように、文化遺産や昔ながらのものをできるだけそのままの形で残すとうことである。そこに私は、文化遺産や昔ながらのものの保存の意義を見出すことが出来た。

### 8月8日(木) (廃村の関係、網取にて調査)

6時起床、洋平と共に白浜を目指す。8時前に絵美に会い、8時35分の船に乗り、船浮に向かう。船浮に到着して、網取に行こうとしたが、網取りには夕方6時10分の便しかなく、またその船は10分しか止まらないということであった。そこで、船浮で船をチャーターして網取りに行くことにした。9時半ごろに網取に到着。

## 怒られた！！

網取に来ていきなり怒られてしまった。なぜかという、アポイントメントをとっていなかったからである。それは、怒られてあたりまえだと思うであろうが、（言い訳をするわけではないが）網取の集落後などを見てまわり、できれば、そこにいる東海大学の研究生の方々に話をお聞きすることができればというような考えであった。自分のスタンスが絵美と違い、聞き取りをすることをメインにしていたから怒られたのかもしれない。いずれにせよ、感じたことは、この網取の集落は、網取としての名前や土地は変わらないし、人が住んでいる地域であるが、村としての機能や雰囲気は失われ、東海大学沖縄地域研究センター網取施設としての機能のみで今では存在しているように感じた。網取にかつて住んでおられた方々やその子どもの方々は別として、その他にここを訪れる人々には、そう見えてしまうのではないだろうか。これが、悪いわけではなく、そう感じただけである。

### 仲里長浩さんからの聞き取り

正式名称は、東海大学沖縄地域研究センター網取施設（途中でこの名称に変更された）という。海洋から農学、社会・文化系と幅広く行われている。昨年10月に地域との密着の深化、社会・文化系の充実のために浦内にもセンターが開設されたい。なぜ、網取なのかという質問に対しては、目の前に広がる湾に理由があるらしい。網取は全国で2番目に深い湾であるのだそうだ（ちなみに船浮が一番）。そして、その海に向かって横四キロ縦二キロの湾には、深いところ、浅いところ、マングローブがあるところ、さんご礁のあるところと沖縄県の海洋自然が、凝縮されているという。そのような理由で網取に施設を置いたのである。竹富町の誘致によるものである。

## 8月10日（土）

7時半起床（新城にて） 遺跡めぐり 12時新城をはなれる 13時前石垣に到着

### 大底朝要さんからの聞き取り

石積み橋以外にも、古見の海側の集落にかつて学校があったという。また、人頭税のあった時代に人頭税の集積所があったらしいが、そのような昔の面影を残すものがなくなってしまい、残念がられていた。後良橋のたもとにあるオグデン道路の碑文、後良橋の碑文を一昨年、県の無形文化財にしていって欲しいと呼びかけたらしい。その返事はまださうだ。橋ゆば節は、歌詞（とその意味）を喜舎場永珣氏が書かれたものだけしか自分は、知らなかったが、大底さんから古見で歌う橋ゆば節を教えていただいた。大底さんの推測によると、喜舎場永珣氏が書かれたものは、古見の橋についてよく知る古見の集落以外の人物が、書いたのでは？、そして古見で歌われているものは、古見の集落の人がつくったのでは？とおっしゃられていた。しかしながら、いずれにせよ、橋ゆば節を誰がつくったのかは、分からないらしい。

大底さんは、三味線の先生である。例えば、（教えている人たちが）豊年祭の歌がなかなか覚えられない。それは、その人々が、実際に農業体験がないからである。言い換えれば、どうして無事収穫できるように、神様にお願いするのか、そのような意味や昔の人の気持ちが分からないからであるとおっしゃっていた。そこで、実際に稲作体験などを実施されているという。また、歌に対する本当の思いというのは、その作者本人にしか分からない。であるから（が）歌に対する思いは、人それぞれ違ってもいいというか、それぞれ

に持ってくればよいのではとおっしゃっていた。大底さん本人は、歌に対する思いを深めるために、実際に歌のある島に行き、思いを深めておられる。八重山の島じまをひととおり周り、二周めに入っておられるらしい。橋ゆば節に関しては、今の若い人は、橋のありがたさは実感できないのではともおっしゃっていた。

大底さんは、古見の伝統が次の世代に受け継がれていくことを強く願っておられた。豊年祭などの古見でおおなわれる行事に関して、若い世代に伝えるために勉強会などを行われたりしたそうであるが、なかなか大底さんと若い人との都合が合わずできなかったそうである。そのため、大底さんがいなくても若い人たちが勉強できるように、豊年祭の歌などをテープに録音したそうである。本来ならそのようなことは、やってはいけないことらしいのだが、伝統行事が受け継がれるためにされたのである。

そのような背景から、大底さんは古見の様々な伝統行事を残していくために、波照間永吉さんのみに依頼されている。大底さんが言うには、自分自身でするより歴史的な知識や考え方を持っている人が調査した方が、調査がより深いものになると言うことであった。また、大底さんが子どもの頃から触れてきた伝統行事は、当然、実際に触れてきているので正真正銘の「本物」であるといえる。しかしながら、他の所から来て調査をし、それを活字にすれば、それがたとえてならめであっても、本物とされてしまう恐れがある。それを考慮に入れ、波照間永吉さんだけに依頼し、他の人には語らないようにしているそうである。

大底さんとの話の中で、自分の事前調査の疑問点『いつ頃「缸ゆば節」から「橋世（ゆ）ば節」に変わったのか？』があったので、大底さんが提供してくださったものから少し考察してみる。

(年代)	(題名の表記)	(備考・出典)
大正8年	缸ゆば節	喜舎場孫生さん
大正13年	橋ゆば節	「八重山民謡誌」
明治17年	橋ゆば節	八重山工工四編纂100周年記念誌「あけぼの」
明治22年	橋ゆば節	「八重山歌節組」
昭和18年	缸ゆば節	天久用立さん(工工四)

#### (学んだこと・感想)

歌に対する思いがとても感じられた。豊年祭 農業体験、各島の歌 各島に渡る。また、伝統行事をそのままの形で、若い世代に伝えていきたいという思いが感じられた。思いというものの大切さ。聞き取りしたことを活字にする責任感。工工四の歴史への興味。八重山研究 喜舎場永珣氏が有名。

#### (参考)

沖縄県立芸術大学「沖縄芸術の科学」「古見の浦」波照間永吉

大底朝要さんからの聞き取りが終わって、船の最終便で西表へ帰った。そこから、里井先生からの紹介の松本貢さん宅へ電話し、松本さん宅へお伺いした。

#### 松本貢さんからの聞き取り

自分の調査の経過を話すと、本棚をあさり、様々な資料を提供してくださった。松本さんから直接聞いた話は、少なかったが、資料関係において「～は調べた？」ということが多く、いろんなことに気づかされた。そして、今の学校の事をゆんたくした。教科書の内

容が全国一律であることの矛盾や、やはり身近な地域から勉強していくことが大事ではないかというような話をした。

#### 松本さんから借りた資料

古見小学校創立 100 周年記念誌「夢の花」1998 年 3 月 20 日発行

竹富町制施行 50 周年記念誌「ばいねしまじま 50」平成 10 年 6 月 30 日発行

「環礁 第 5 号 <特集> 赤と緑の画家・宮良信成」砂川哲雄 環礁社

「色彩の世界・宮良信成 そのあしどり」1978 年 10 月 1 日発行

橋ゆば節を踊っている 1 シーン、建設中の前良橋（写真）

（学んだこと・気づいたこと・疑問点）

#### ・疑問（松本さんとの話から）

・どうして橋をつくらなければならなかったのか？（オグデン道路） 公文書館

・どうして古見の橋が八重山の中で比較的早く橋がつくられたのか？

八重山で一番早い？

#### ・その他

・事前調査の段階で、もっと広い視野での古見（の橋）を見ておくべきであった。

里井先生の文章やそこに載っている参考文献（古見の歴史 - 考古学に見る古見 - ）

沖縄県教育委員会編「金石文 - 歴史資料調査報告書 」（1985）

「八重山島由来記」（1727）

喜舎場永珣「八重山民謡誌」

西表・古見の石積み橋（「石垣市史のひろば第 8 号」1985）

・宮良信成にスポットライトを当てた調査もおもしろいかもしれない。

宮良信成さんは、教師であったが、自分の中で昔の先生は、とてもかたいイメージがある。しかしながら、宮城信成さんは自分のイメージを大いに壊してくれそうな人物である。

・事前調査が充実していなく、聞き取りの際に焦点を絞った質問ができなかったのでは。質問された方も、質問者が何を聞きたいのか分からなかったのでは。

#### （まとめ）

#### ・聞き取りに協力して下さった方々（聞き取りした順番で）

平良信明さん（電話のみ）

古見小学校の校長先生とじろくさん（事務）

石原昌武さん（古見公民館館長）

新初蔵さん

親盛ヒロ子さん（新盛基代子さん他 1 名）

大底朝要さん

松本貢さん

仲里長浩（ながひろ）さん（東海大学沖縄地域研究センター網取施設（廃村の関係））

#### ・見せていただいた又は、いただいた資料

劇「古見の橋」台本 2 種類

古見小学校創立 100 周年記念誌「夢の花」1998 年 3 月 20 日発行  
竹富町制施行 50 周年記念誌「ばいぬしまじま 50」平成 10 年 6 月 30 日発行  
「環礁 第 5 号 <特集> 赤と緑の画家・宮良信成」砂川哲雄 環礁社  
「色彩の世界・宮良信成 そのあしどり」1978 年 10 月 1 日発行  
橋ゆば節を踊っている 1 シーン、建設中の前良橋（写真）

#### ・劇の変遷と台本のゆくえ

宮良信成さん（台本を書かれた、結願際で劇が行われる）昭和 21 年度在籍  
台本を石原さん（古見公民館長さん）からお借りする。  
石垣の市民会館で行われる予定であったものを大底朝要さんからお借りする。  
宮良安亮さん（結願祭を見て、影響を受け、石垣で公演を行う）昭和 22・23 年度在籍  
不明（台本）

（以後、結願祭で行われていたが、人口の減少によって途絶える）

平良信明先生（現新川小学校校長、古見小学校で行う）昭和 46・47 年度在籍  
那覇の方へ持っておられる

（最近）新城先生（入院中のため、連絡がつけられない）

宮良先生（現在、まきら小学校）

（備考）

- ・古見の校長先生の旦那さんが台本を持っておられるらしい。
- ・じろくさん（古見小学校事務）が劇のビデオ（最近のもの）を持っておられる。
- ・松本さんの奥さんが劇のビデオを持っておられるかも。
- ・石垣の中学校で劇が近々行われる？

#### ・橋について

後良川（現在の後良 1・2 号橋）には、石橋の当時、約 12 の橋脚があり、その間を水路が流れていた。そして、その古見集落から一番遠い水路はとても深かったそうである。前良川（現在の前良橋）には、8 つほどの橋脚があったらしい。

石積み橋を作る時、古見の家々にある石積みを橋の建設材料に使ったので、家々から石積みが消え、その代わりに竹を使って家の塀代わりにしたという。

昭和 8 年の台風によって、石積み橋が使えなくなり、解体され、新しい橋をかけるきっかけとなったようである。石積み橋当時は、石積みの上に板を置いたり、線路が置かれていたりした時代があったそうである。

前良橋の古見側、後良 2 号橋の古見側にそれぞれ碑文があるらしい（後良 2 号橋の方はオグデン道路の感謝記念碑も存在）。

#### ・橋の変遷<sup>1</sup>（一部付け加え）

1690 年（康熙 29） 「三離橋架橋。（前良川、南又橋）古見での橋の始まり。木橋長さ 228 尺幅 3.6 尺」

1696 年（康熙 35） 「大枝橋架橋。（後良川、北又橋）木造長さ 79 尺」

---

1竹富町史・別巻 3「写真集 ばいぬしまじま - 写真にみる竹富町のあゆみ - 」竹富 町役場町史編集室 平成 5 年 3 月 3 1 日発行 p.299

1715 年（康熙 54）「古見村の三離橋、大枝橋、石橋に改築」

（聞き取りから昭和 8 年の台風により、石積み橋は使えなくなる）

1956 年（昭和 31 年）「前良川と後良川の間に形成された集落で、架橋は琉球王府時代からの行政の課題だった。架橋は最初、木造橋だったが、後に石橋に変わった。橋は台風などの自然災害を受けながら補修された。その中で前良橋、後良橋が 1956 年（昭和三一年）に架設され、

河川の往来が便利になった。」<sup>1</sup>（同ページに鉄橋の写真あり。オグデン道路と関係する？） 1973 年 3 月（昭和 48 年）「古見の前良、後良両架橋竣工」

2000 年 9 月（平成 12 年）前良橋竣工

2001 年 3 月（平成 13 年）後良 1・2 号橋竣工

#### ・橋ゆば節について

橋ゆば節は、歌詞（とその意味）を喜舎場永珣氏が書かれたものと古見で歌うものの 2 種類が少なくとも存在する。（大底さんの推測によると）喜舎場永珣氏が書かれたものは、古見の橋についてよく知る古見の集落以外の人物が、書いたのでは？。そして、古見で歌われているものは、古見の集落の人がつくったのでは？ということ。しかしながら、いずれにせよ、橋ゆば節を誰がつくったのかは、分からないらしい。

橋ゆば節については、「橋（世ば）ゆば節」と「砦ゆば節」がある（ちなみに、「砦ゆば節」の「砦」という字は、「いしばし」という意味を持っている。（小川環樹ら著「新字源」より））。

---

1竹富町史・別巻 3「写真集 ぱいぬしまじま - 写真にみる竹富町のあゆみ - 」竹富町役場町史編集室 平成 5 年 3 月 3 日発行 p.201